

今年には法然の八百年、その弟子親鸞の七百五十年の遠忌の年。戦乱、凶作、地震など波乱と激動の鎌倉時代を生き抜いた2人の思想は現代に何を語りかけるのか。4人に寄稿してもらう。

環境問題をはじめとする、現代社会的な諸問題のなかには、近代の知的枠組みそのものが抱えている矛盾によって生じたものがある。現代の学問は非宗教的である。と称しながら、枠組みそのものは、キリスト教から多くを継承している。たとえば「選択」「必然」「共同体」「自由」「責任」「契約」「コミュニケーション」「計画」といった概念は、いずれも濃厚に宗教性を帯びた言葉であるが、それをあたかも中立的な概念であるかのように「脱臭」して使っている。私はそこに、学問の閉塞の大きな原因を見る。

この閉塞を打破するには、別の宗教的伝統に依拠する必要がある。特に親鸞思想は、西欧的意味での宗教性の根幹である「罪」の概念を解消する先鋭的な教えである。罪を犯さないではいられない人間の「愚」そのものに気づかされるのが、救いのゆえんであり、さらにその救いを信じられないという「愚」

に気づかされることさえもが、救いのゆえんだというのだから。

私は、この先鋭的な思想に意識的に依拠することで、既存の知識を組み替える戦略を構想し、それを「親鸞ルネサンス」と名付けた。親鸞ルネサンスは二つの方向性を持つ。第一は親鸞の「愚」の大地に立つ「わたしのための学問」を打ち立てることを目指すものである。現代の知識・問題意識を

背景として、親鸞を見直すことで、その現代的意義を取り出すことがその目的である。

もう一つは「親鸞によるルネサンス」である。これは、非人格化され、細分化されてしまい、シュレッダーに掛けられたような現代の学問から抜け出し、親鸞の「愚」の大地に立つ「わたしひとりのための学問」を打ち立てることを目指すものである。



やすとみ・あゆむ 1963年生まれ。京都大学大学院経済学研究所修士課程修了。同大学人文科学研究所助手、名古屋大学情報文化学部助教授などを経て、09年から現職。著書に「生きるための経済学」(NHKブックス)、「経済学の船出―創発の海へ」(NIT出版)などがある。

## 愚の大地に立つ学問 目指す

賢<sup>賢</sup>しらの暴力に過ぎない。自身と対象とを切り離さず、対象に没入することで、逆に自らの「愚」を白日のもとに晒すことが、「愚」に立脚した「わたしひとりのための学問」である。近代の学問は、人間が自分の



親鸞聖人坐像—三重・専修寺蔵  
(29日まで京都市美術館で開かれている親鸞展で公開中)

力で世界の本質を理解し、その作動を予測して制御することで、自らの幸福を増進する、というものである。私はこの自力作善の思い上がり、現代社会を窮地におとしられていると考える。たとえば、福島第一原子力発電所の恐るべき事故は、その典型的な一例である。原子力産業は、決して制御しようのないものを、制御し得ると称して利用するという思い上がりの極致だからである。そのような欺瞞の上に追求し得る「幸福」は、「幸福の偽装工作」に過ぎない。

「親鸞ルネサンス」は、因果縁起の織り成す世界に身を置いて、他力の大船に乗るための学問である。それは我々の生きる力への信頼を出発点とし、その發揮を阻害するものを取り除くための学問なのである。